

先日の連休に木崎湖キャンプ場での3日間連続イベントをお手伝いしてきました。GWの時にも駅前のぶたのさんぽが出店して、チャーシュー特大のジェイソンさんラーメンを食べましたが、今回も特性カレー頂きました！肉が大盛り過ぎて下のカレーが見えないほど…。美味しかったです(^^)！

大町巡拝の旅 『仁科三十三番札所めぐり』

第9回目となりました『仁科三十三番札所めぐり』、二十四番札所の神宮寺、二十一番札所の瀧ノ入（瀧見観世音）の紹介。

<二十四番札所 神宮寺 じんぐうじ >

『 枯れし木に 花咲く誓い あるものを
願う心の 開かざらめや 』



神宮寺跡地にある札所案内

大町市社・宮本の国宝仁科神明宮境内入り口にあった金峯山神宮寺は、神明宮の別当寺で、神仏習合の姿でした。この寺は、高野山西禅院末寺で、山号を金峯山というように、いかにも修験道との関係が深かったことを思わせる。神宮寺の開創がいつなのか知るべき史料はないが、現在盛蓮寺に安置されている不動明王立像が、鎌倉時代後期の造立であることから、およそその頃ではないかと推定される。

神宮寺は維新後の廃仏毀釈により廃寺となった。元住職の神方盛一は、しばらくもとの寺院で寺子屋を開いていた。学制が始まると、



上の画像は 国宝 仁科神明宮

この本堂は、宮本・曾根原・閨田を通学区とする宮本学校となった。明治18年には、校舎となっていた神宮寺の旧本堂は池田町の常念寺に売却され、現在その本堂となっています。また前記の不動明王立像、及び文安四年(1447)の銘ある木造薬師如来坐像（ともに市文化財に指定）は、曾根原の盛蓮寺（二十五番札所）に移されたが、本尊であった十一面観音の所在は知られていない。

<二十一番札所 瀧ノ入（瀧見観世音） たきのいり >

『 住む龍の さしくる玉か 滝津瀬の
岩に砕くる 浪の光は 』



大町東小学校 横の55号線を八坂方面へ行き、途中の沢を300メートルほど入った所にある滝が、二十一番札所の瀧ノ入になります。巨大な安山岩の間から吐き出される滝の大きさは、高さ5メートルほど、滝つぼも深くはないが、あたりの雰囲気は幽邃（ゆうすい）といえます。滝口の向かって右側のしづきがかかる岩に、観音坐像（如意輪と見る人もいます）が、線刻されています。これが瀧ノ入観音です。しかしながら、この観音様は苔に覆われているために、光線のあるばいなどでよくよく目を凝らさないとわかりません。

今のところ 何時・誰が彫ったものなのかはわかっておりません。

滝つぼの傍らには松尾芭蕉の<ほろほろと山吹散るや滝の音>という句碑があります。芭蕉がここへお訪れたのではなく、句の心がこの滝の趣に似つかわしいとして、常光寺村の庄屋であり、俳人でもあった横川青雅（弥一右衛門）が、俳聖芭蕉の百回忌にあたる寛政5年（1793）10月13日に、この句を選び句碑を建てたようです。天保十四年（1843）、豊田利忠の名所案内記「善光寺道名所図会」にも、清音の滝は挿絵とともに紹介されています。山の中にかかる大きな滝と、その前方に遊ぶ人々、滝の道をやってくる旅姿の人たちが描かれ、漢詩や和歌もそえられています。現在大町から八坂に至る県道は、松崎から滝の上方を通っているが、古くは滝の前を通ってその上に出たようです。

参考資料：仁科三十三番札所巡り 篠崎健一郎著



新聞に載らない内緒話！

「もく星号」墓参

先日、仕事で伊豆大島へ出掛けてきた。朝8時に竹芝桟橋出発、夕刻帰京の弾丸ツアーだが、ジェット船のおかげで片道1時間45分の旅である。

島は紫陽花（あじさい）の季節。6月中旬から7月上旬が見ごろになる。島内に「あじさいレインボーライン」という、4・8キロのウォーキングコースがあり、曲がりくねった小道は最盛期には紫、薄桃色、白などでカラフルに彩られる。その数、3万株。

紫陽花の命名は唐代の詩人・白居易だと、作家の陳舜臣が「六甲随筆」で記している。日本で言う紫陽花は、実際の花とは異なるそうだが、紫色に、ほのかに甘い香りを放つこの花は「紫陽花」の文字がいかにも似合う。梅雨の、か細い雨筋に薄明かり、それが多彩な花卉を透いてしっとりとした繚乱となる。栗鼠が小道を駆け抜けた。

古く、多くの俳人が句を残している。

「紫陽花や 藪の小庭の 別座敷」は松尾芭蕉。「紫陽花の末一色と なりにけり」が小林一茶である。

さて、帰り際に案内役の人が「せっかく来たんだから、足を伸ばしてみませんか」と声をかけてくれた。車で島の東海岸を走る。バス停「大砂漠」から途中、車を捨て徒歩で10分ほど。視界が突然開け、褐色の、巨大なスロープと砂漠が目飛び込んでくる。一般に三原山は正面から見ると御神火立ち上る、緑の山である。ところがその裏側は、吐き出す噴煙、ガスの影響で草木が育たない。広漠、寂寥の風景が広がる。見上げた斜面に1基、供養塔が見えた。黄色い花が供えられていた。「あれは？」と声をかけたら案内の人間は「もく星号墜落で亡くなった人たちの慰霊塔です」と言う。

1952年（昭27）4月9日、羽田発名古屋・伊丹経由福岡行きの日航機・もく星号は羽田を午前7時42分に離陸した直後に消息を絶ち、翌朝三原山山腹に墜落しているのが確認された。乗客、乗務員37人全員死亡。いまは知る人も少なからうが、活弁士・漫談家の大辻司郎や八幡製鐵社長の三鬼隆などの著名人も搭乗していた。終戦直後の忌まわしい航空機事故である。もっとも、当方が生まれる前の事故で、「なるほど、ここが...」と息を呑んだ。「この褐色の斜面に墜落したそうです。パイロットは、この山肌を滑り降りるつもりだったのでしょうか」と案内人が説明した。

今だ、遺族であろうか、慰霊碑への墓参が続く。屹立（きつりつ）する塔は、今は見えぬ残骸（ざんがい）を見下ろすようにして、天に伸びている。

大町北小学校「北小縁日」

10月9日（土）大町北小学校の「北小縁日」が行われました。この日は土曜参観の日にもなっており、1時間目に授業参観その後「北小縁日」となり親子そろって各講座へと分かれ楽しいひとときを過ごしました。この「北小縁日」ですが、昨年度から始められた行事で、もともと行われていた教養系行事と体育系行事を一つにまとめ、大きなイベント行事へと発展させた物だそうです。

『人との縁を楽しむ日』として、親子で向き合い互いを理解しあう良い機会とし、また家族や仲間、講師の方とふれ合い、交流を深めながら楽しく時を過ごすというのがテーマとなっています。講座の内容もさまざま、紙飛行機作り・陶芸・理科の実験教室・パッチワーク・石の玉作り・ビーズアクセサリ・木っ端工作・コンピューター・ポーセラーツ・押し花壁掛け・手作り絵本・フラワーアレンジメント・ネイルアート・そばうち・おやき作り・ドッジボール・ソフトバレー・将棋・フェルト手芸・折り紙・天体望遠鏡作り・エコバック作りなど計22講座。事前に子ども達にやりたい講座をアンケートし、なるべく希望にそえるよう実行委員会が調整を行い、それぞれが参加する講座が決定されます。（6年生が最優先に振り分けられるので残念ながら希望する講座を受けられない事もあります）各講座の講師は、学校の先生方だったり、小学校に通う生徒の親御さんだったり様々です。充実した一日でした。



沢山ある講座の一つ
木っ端工作の作業画像！
なにを作っているのかな？？

川村二郎の人間万歳

<井上ひさしさん>七月一日、東京・丸の内の「東京会館」で、作家、井上ひさしさんの「お別れの会」があった。会には、ノーベル文学賞の作家や歴代の直木賞作家たちのほか、井上さんの芝居に出た女優、男優、演出家が顔をそろえ、それはそれは豪華なものだった。しかし笑顔の遺影を見ていると、食事をしながら、そしてまた芝居の幕間にたばこを吸いながら、日本語の使い方や文章の書き方についてうかがったことが、次々と頭に浮かんでくる。優しく包み込むような声が、聞こえてくるような気がしてくる。こみあげてくるものがある。ここは一番、「泣くがいやさに笑い候（そうろう）」と言いつつ、大手出版社の馴染みの編集者をつかまえて思い出を聞く。経験豊富な編集者はみな観察が独特で話術がうまい。そういう編集者でなかえれば、井上さんの担当は務まらない。笑っていると小説家、丸谷オーさんがマイクを手に原稿用紙を取り出した。その昔、『週刊朝日』に『パロディ百人一首』と『日本語相談』という企画があった。どちらも井上さんと丸谷さんがいたからできたものだった。お二人は盟友とっていい間柄である。丸谷さんは二年前、やはり盟友の国語学者、大野晋さんを送らねばならなかった。そして井上さんである。心中察するに、余りあるものがある。しかし原稿用紙八枚の弔辞は、井上さんの業績を語って、間然するところがなかった。弔辞は『あいさつは一仕事』（朝日新聞出版）に収められることになった。

（有）大町デリバリーサービス松尾新聞店

大町市大町2675-7（ハローワーク大町すぐ近く！）

電話：フリーダイヤル 0120-030553

FAX 0261-22-8402

HPアドレス : <http://shimbun.web.fc2.com/>

